

『緋文字』研究を批判する

上野直蔵

ホーソンの『緋文字』はたしかに「罪」がテーマである。しかし、われわれの焦点を「罪」のみの問題にしぼって考えることは果して妥当であろうか。『緋文字』がホーソンの他のどの小説よりもすぐれた傑作であるゆえんは、この「罪」の問題をめぐって、物語が展開されるにあたって、それがアレゴリーにならずに二人の生きた人間（ヘスターとデイズデール）を創り出したことにある。一体ホーソンはアレゴリーを使用することの好きな作家であって、すべての彼の小説に大なり小なりアレゴリーの要素が出てゐるし、また、この『緋文字』においてもパールやチングワースはアレゴリーの要素の強い人物であり、この意味で秋山氏の「パールやチングワースはあまりに機械的である」という評は正しい、と考へる。

だから、テーマとしてはむしろその「罪」にたいして二人の生きた人間がどのように対処していったか、つまり、この

「罪」が二人の人物のもっていた潜在的な性向をどのように発展させて行き、どのような結末に到達させたか、ということである。結論を言つてしまえば、ホーソンの答は「この二人の人間は全然互に別個の世界に住み、彼らの世界はついに相交わらなかつた。そうして彼らの生涯は終りにいたるまで平行線であり、恐らくは死後においても別々の天国（？）に住んだであろう」である。それは「罪」にたいして「どのように対処すべきか」というゾルレンのテーマでなくて、現実において二人の異つた性格がどのように対処したか、ということである。このことをテキストに徴して論じていこうとするのであるが、それに先立つてピューリタニズムについて一言しておく必要がある。

ニュー・イングランドのピューリタニズムの特徴について、ここでわざわざふれておくゆえんは、ヘスターと牧師デイズデールが生きていたボストンの道德的空氣を理解する上に

大切なことによるのは勿論であるけれども、しかしこの点ならば漠然としたピューリタニズムの一般的理解さえあれば、そのあとは作者ホーソンが随所に作者自身のポストン社会にたいする批評、説明をしてわれわれの考えを導いてくれるから、当時の道德的雰囲気を知ることができるのであるが、これと更に、述べようとする意図は、この説明を欠くと、牧師デイズデールがピューリタンのよき代表者であると同時に、ピューリタンの限界をも十分に身につけた人間であることが理解されないからである。また、更に牧師の世界とヘスターの世界の対立が理解されないからである。デイズデールがピューリタニズムのよき代表者であるに反して、ポストンはピューリタニズムの悪しき代表である。ピューリタニズムそのものはよき要素も悪き要素をもそなえていた。

ピューリタニズムの中心思想をなすものは次のものである。

① 予定説 (Predestination) 人間が救われるか、否かは、すべて神の摂理による。人間のなすあらゆる行動は神によつて予定されている。

② 意志の束縛 (Bondage of the will) 人間は自由ではない。人間の行動は自らが決定する権利をもたない。神によつて定められるのである。

③ 選ばれたものの不撓不屈 (Perseverance of the saints) 神に救われたと決つたものは如何なる困難にもたえて、信仰を固く保つていかねばならない。

ピューリタンは感性よりも知性を重んじた。これはピューリタニズムを含む新教そのものが、ルネサンスにおける人智の発達と科学の勃興との結果として由来した宗教改革の所産であることを考えれば納得できることであるし、その礼拝の形式を見ても旧教では壮嚴の美的感覺を通じて直感的に神の神秘を悟らしめるコンミニオンが中心となつてゐるのに反して、新教では説教が中心となつてゐることも、その一つの例証である。

サンタヤナはその小説『最後のピューリタン』で、知的に非常にすぐれていながら、感情の自然の流露のできない道德感の強い青年を主人公として、最後のピューリタンとして登場させ、それと対照的に享樂的で優雅なヨーロッパ育ちの今一人の青年を連れ出している。思うに、アメリカの文化はヨーロッパの文化のような旧教時代の裏づけがなくて、突然に新教の文化から始まつたがゆえに感覺的に貧しく、文学にあつては十九世紀末にいたるまで(或は、現在にいたるまで)、強さ、真実さ、具体性において優れていても、感覺のゆたかさ、つややかさ、および愉樂をもたなかつたのである。こう言つたとしてアメリカ文学が長らくピューリタンのであつたといふのではない。アメリカ文学の歴史の中にはピューリタンの流れは現われとしては短かく、後には意識的にそれと反対するよう努力が見られるのであるから、すべてがピューリタニズムの影響のためであるといふのではなく、新教国とい

うものは全体的に感性に貧しく、知性に偏いているという意味である。

このように考えるので、私は松山氏のいう「ビュリタニズムは Heart を重視する」という説には賛成しかねる。同氏は所説の例証としてジョナサン・エドワーズの言葉をあげているが、ジョナサン・エドワーズは位置としてはビュリタンの大立者ではあったが、彼の個性としては大へんミスティシズムに偏いた人であつて、「神の恩寵の甘美さは、ちょうど蜂蜜の甘美さがそれをなめた人にだけ分るように、体験したもののみが分り得る。それはとうてい言葉で伝達できないものである」という意味のことを、その説教において述べているが、このような直観による体得は正統ビュリタニズムから少し逸脱したものであつて、これは後のエマソンに一派相通するものである。

さて論述をもとに戻して、牧師デイズデルであるが、彼が何をなしたか、また、彼が何をなさなかつたか、を考えてみよう。先ず第一に、彼の告白は人間にたいする温い愛情から出たものではなかつた。これを北垣氏は「彼は裁きの神を見て、愛の神を見なかつた」と言っているが、正にその通りである。彼の告白は、彼と神との緊迫した対決が彼を推してなさしめたものであり、また、彼と彼を信ずる教会員たちとの虚偽の關係に耐えかねて、彼がえらんだ道であり、その道はたしかに勝利の道であり、崇高なものであるにしろ、愛

情から出たものではなかつた。少くともヘスターとパールにたいする愛情から出たものではなかつた。このことはドストエフスキの『罪と罰』で主人公ラスコリニコフが無神論の立場からして殺人を犯し、後に神を信じる娼婦を通じて愛情をまなび、これによつて告白にいたる過程とは正反對の道をとるのである。ヘスターと牧師とがお互の愛情に燃えた時は一度あつた。しかし、その甘美な愛の経験はこの物語の始まる一年ほど以前に起り、そして直ちに暮を閉じてしまつたのである。その一年前の恋愛の時期においても、われわれは牧師が本當にヘスターを愛したかどうかは、知らないのである。一方、ヘスターの方では熱情をかたむけて彼を愛していたことは、彼女が後にパールの奔放な性格をみて「この子供の魂と肉体が私の胎内でできた当時の私の感情の状態——あの感情のはげしさが、この子に影響したためであらうか」と、いぶかる条り (p. 103) からしても、また、その他の箇所で作者が説明的にのべている、ヘスターの熱情的な性格からもうかがわれるところである。これに反して、牧師に關しては、彼がヘスターを、また、彼の子であるパールを愛したとは一行すらすら述べられていない。

デイズデルとヘスターとの關係において、彼の方は一方的に愛をうけとり、また、助力を与えられる側の立場であつた。われわれが始めてヘスターと牧師とが如何なるものかを知るのは、この小説の最初の場面でヘスターが町の広場に

三時間さらされてゐる時に、知事が牧師に「ヘスターに姦通の相手の名をいうようすめてくれ」と言ったのに応じて、牧師が美しいふるえる声で彼女に呼びかける際であるが、話がすむにつれて、われわれはこの場合に牧師は、北垣氏の言うように、大きな賭けをしていたことを知る。牧師は内心ヘスターが自分の名を言わないであろうと信じ、それを半ば願ひながら（一方においては、一そう名を言ってくれる方を望んでいたであろうが）、語りかけた。しかしヘスターは名ざしをしなかった。彼はヘスターに庇護された。彼は受ける方であり、彼女は与える方であった。

ヘスターとパールとが野原の一軒家に住み、ヘスターは針仕事で口を糊した。牧師は広い牧師館に住み、聖書と神学書と召使とをもった。この間、牧師を苦しめたのはヘスターとパールをこのような孤独と窮乏の生活をさせたことではなく、彼自身と神との問題であった。

七年間の後に、彼がヘスターとパールと共に広場の台上に立つにいたるまでの間に彼はヘスター親子と他人のいないところで二度出會っている。一度は真夜中の広場においてであるが、この時牧師はヘスターとパールとが手をつなぎ合つて立つと、「新しい生命、自分以外の生命がドツと彼に向つて押しよせ、彼の心臓に奔流のように注ぎ入り、血管を走り廻つた。それは、まるで、母と子とが彼の半ば枯化した体の中に生命の温かさを伝えているようであつた」(p. 173)と描か

れている。かくして母と子との不幸の原因となつた彼はかつて母と子から受け与えられる立場にあるのである。

もう一つの秘かな會合は森の中においてであつた。この會合におけるヘスターと牧師の眞の立場は後述するが、少くとも常識的な意味では——というのは、少くとも牧師とヘスターの交わした會話の面のみでは——牧師は弱きものであり、強きものの愛と助力をねがう立場に立っている。彼はヘスターに向つて、「あなたは強い人だ、何とかしてくれ」と訴えて、ヘスターに力づけられている。ヘスターは弱い子供をはげます母親のように、「あなた一人を外国へはやらしません。私も行きます」と断言する。ここにおいて彼は外国へ逃れる決心をするのである。

彼のパールにたいする気持をたどつてみよう。彼は殆んど最後の時までパールにたいしては冷淡であるか、パールを怖れているか(パールのかんしゃくが怖い、ヘスターに向つて「私を愛するのなら、パールのかんしゃくを鎮めてくれ」と乞う。これは、パールが彼の中にある偽りを見ぬいて彼を許さないためなのである)、或はパールにたいする愛情を乞うか、これらの何れかの態度をとっている。知事屋敷で三歳のパールを見た時、彼は「ちよつとためらつたが、彼女の頭にキスをした。」彼女は大笑いしてとんで行く。

牧師は牧師館で医者テリングワースと話している時、窓外にヘスター母子が通つていくのを見る。医師はパールについ

て、「あの女の子は悪い小鬼なのだろうか。愛情をもっているのだろうか。彼女の内には存在の原理が発見できるだろうか」と聞くと、牧師は「(あの女の子は)何ももっていない、破られた律法の自由以外には。(と、まるでその点について、これまで自問自答していたがのように)善の可能性を彼女がもつかどうか私には分らない」(p. 438)と答える。作者が「(と、まるでその点について、これまで自問自答していたかのように)」と叙述しているところから、これが牧師自身の真の感情であって、チリングワースに対して父子関係を隠くすための偽りの答えでないことを知る。してみると、彼はパールについて多分に否定的である。

森の中の会合では彼はパールについて、「いつもパールの顔が自分と似ていると世間が感ずきはしないかと思つて」恐れていた、と言ひ、また、「他の子供たちは私を見て恐れるのにパールは二度までも私にたいして親切な態度を見せてくれた」(p. 433)と、まるで恩恵をうけたことを感謝するかのように入る。

最後の瞬間の告白にいたるまでのヘスター對牧師の立場は、すでに罪を告白して、そのために罰をこうむっているヘスターに向つて、まだ告白せず、そのために苦しみの大きい牧師がすがりついている。この小説では作者は前述のように随所で心理の解説をこころんでいる。牧師の心が一大飛躍をする最後の瞬間——牧師が知事就任式説教の原稿を書きおえてか

ら、広場に立つまでの間の心境に關しては作者は全くの沈黙を守つて、そこにすばらしい魂の深さを暗示するという効果をあげているが、それ以外においては作者は editorializing を用いているので、それに従つていくと、牧師がヘスターに對しては一方的に自分自身の苦しみを訴え、彼女の耐え忍んでいる苦しみについてはむしろ無関心であることを知る。彼女が苦しみにたえる強い人間であることで安心をし、むしろ彼女を羨んでいる。(森の中の出会いにおいて)

以上が牧師とヘスターとの優劣の關係であるが、その他に、牧師が人間として、弱さ、欠点をもっていることが所々に示されている。その弱さは主に彼がずるく、独りよがりであることに見出される。

たとえば、牧師はしばしば説教壇上から間接的告白をこころみる。彼は自分が大罪人であることを人々に告げる。しかし、人々はかえつて彼の自己をとがめることの敵しいゆえに、彼を聖者だと思ふ。牧師も多少はその効果を計算に入れている。(作者はここで、「牧師は自分の漠然とした言葉が聴衆にどう解釈されるかをよく知つていた——彼は何という巧妙な、しかし、悲しい偽善者であつたことか」と述べている。p. 163)更に、別の例証として私は北垣氏と同じ箇所を引用したい。それは牧師がチリングワースと告白の価値について議論するところである。牧師は医者にたいして、「中には、非常に苦しいけれども、それに耐えて告白しない人がある。そ

これは告白することによって、かえって善が生みだされないとを思うからである」という条りで、北垣氏はこれはカルヴィニズムの考え方の一つだと言っているが、或はそうかも知れないが、むしろポイントは牧師のずるさを証立して用いるのであると、私は考えたい。牧師自身もこのはかない理由を自分に言いかすことによって、自分自身の告白しない行為を正当化しようと努めているのである。(pp. 150-151) これは偽善である。告白しないのが偽善ではない。それにはたいして弁解するのが偽善である。また、「彼は実際、自分の過度にまで敏感で神経質な性質を刺戟するような話題からは逃れる便利な能力をもっていた」と、作者は述べて、自らの痛みについては用心深い人間であることを示している。森の中の出会いにおいても、ヘスターが医師の本体を明らかにした時、「彼は彼女を(怒りの)激情でもって見た。その情は……彼の心内の要素中、悪魔に属する部分であり、悪魔はその部分を足場にして他の部分をも征服しようとしていた。ヘスターに向けられた彼のしかめ面ほど、けわしい、はげしいしかめ面はなかった」と説明されている。彼はチリングワースについてヘスターを咎める権利があると思っているし(またヘスターは彼女の母性的性質からこれを疑わずに承認しているが)、そう思うこと自身が身勝手な思い上りである。さればこそ、作者は「悪魔の部分なる怒り」と呼んだのである。

牧師デイズデールは外国へ逃れると決心して、それが知

事就任式説教の後に実行できるときいて喜ぶ。なぜなら、説教の責任を果してから去ることが出来るからである。この時はまだ彼が告白しないで外国へ逃亡するつもりの時であって、公けの責任を果すのに罪ある彼がそれに備するかどうかをすっかり忘れていたのであるから、考えれば、おかしきことと言わねばならない。故に、作者は「この哀れな牧師のもつ洞察力ほど深く、正確なものが、このようにみじめに狂うとは何と悲しいことだろう」(p. 44)と、解釈している。

* * *

以上において私は牧師の性格の弱さ、思考の狂いを指摘してきた。このうち、幾パーセントが彼の育ってきたピューリタニズムの特異要素によるものであると、作者はみなしているかは明らかでない。しかし、次のことだけは言うことができるだろう。作者は牧師について「彼はヘスターと異り、広い観点に立ち得る経験をもたず、その経験はただ当時の宗教の一般的戒律の範囲内にとどまった。当時聖職にあることは社会の最上層にあることであつたから、彼はその戒律になお更しげられた。更にその方針、更にはその偏見に彼もまきこまれた。牧師として彼の考えは属する教派のわくの外へ一歩も出ることができなかつた」(pp. 227-228 意訳)と、述べているように、この牧師は、良きにつけ悪しきにつけ、根からのピューリタンである。その良心の強さにおいて彼は、ピューリタンで

あるが、さらに他の部分においてもそれが見られる。

さきにもふれたところであるが、ピューリタンは自分たちが神から選ばれたもの、という自信をもっていた。神は人が生れる以前からしてすでに天国に入るべき人間と地獄におちる人間とを定め給う。この二つのキャテゴリーのうち、ピューリタンは当然前者である。ゆえに彼らは優者であり、他のものからの奉仕を嘉納する立場にある。

牧師デイズデールがヘスターとの関係において一方的にヘスターの献身をうけ入れ、或は、それを要求したのも、彼自身の弱い性格にもよるものではあるが、作者の意図は、ピューリタンのうちの優者である牧師である彼が無意識にもついていたエリート (elite) の意識である、ということにあると考える。

牧師はまた自己が告白する勇氣をもたないことをいろいろ自己弁護しようとする。これとても、この宗派が長年にわたって彼に植えつけてきた、自らを正しいとする態度の痕跡である、とみられないことはない。選ばれたものは謬ったことをする筈がない、という意識は、牧師が十戒の一つを破った行いをしていいる時でも、自己の行為を正当化しようという努力に現われているのである。しかし牧師の最もピューリタンののである (しかも彼はよきピューリタンである) 点は彼の罪感意識にある。罪感については岩山、秋山、松山、北垣、の四氏ともそれぞれの観点から述べたところで、特に北垣氏の

いう如く、彼は裁きの神を見て愛なる神を見なかつたことは彼が如何にこの宗派の所産であつたかを示すものである。

以上によつて森の中の出会いが終るまでの彼についての総決算がなされたと思う。すなわち、彼は独りよがりの、自己中心的な、依存的な人間で、しかも鋭い良心の持主であるが、あまり神の愛、ひいては人の愛——を感得する能力をもたない人間として描かれている。彼の人間的価値は後にのべるヘスターの人間の価値より低いものとして描き出されている。

ところが、最後のどんでん返し^{どんでん返し}がきて、彼の魂は一大飛躍をとげる。この物語ではヘスターも牧師も共に苦しみによつて魂が鍛えられて、ともども向上の一路をたどるのであるが、彼においては、この最後の一大飛躍があつて、彼の魂はヘスターの魂の達したよりも宗教的に高次の救いを得るのである。この点について秋山氏の立論はよく整い、思考も深く、充分に意をつくして述べている。私も全く彼と同感である。牧師の罪の意識はヘスターのそれよりも宗教的に高次のものであつた。しかしして、森の中の出会いから帰つて後、知事就任式説教の原稿を彼が書き始めてから、二日後、その説教を行つてから広場のさし台の上に立つてヘスターとパールの手を握り群衆に告白するまで、その間、彼の胸中に如何なる思いが去来し、如何なる過程で告白の決心がなされたのか、われわれには分らないことである。作者はこの点について沈黙し

ている。他のところでは心理解説をこころみる作者が、この二日間の牧師の心理について何らの説明をもしていないことは素晴らしい手法である。彼のこの魂の飛躍こそは言葉で解明できない神のくすしき御業であり、神秘であり、神の御心のある時、人間の魂が如何に可能性をもつものであるかということの表現である。

たしかに彼の罪の意識はヘスターのそれよりも宗教的に高次のものであり、その結果、彼は高次の救いに到達した。しかし、他方から言えば、それは牧師が自分自身のせまい世界の中で、自分自身の戦いを戦い、やがて勝ち得た彼のみの利己的勝利である。彼は自らの苦しみに全精力を集中してしまひ、ヘスターとパールを考える余裕をもたなかった。むしろ苦しんでいる故にヘスターとパールの同情をうけるのが当然と考えた。そうして遂には彼ひとりだけの高い天国へ入ってしまった。

ヘスターは彼とは精神的に全然別箇の世界に住んでいた。牧師の世界が神——罪——救いという狭く、けわしい宗教の世界であったのと対照的に、彼女の世界は欧州の進歩的な女性の解放された思想の世界であった。彼女の女性観は次によって明かである。「彼女は女性がこの世界において幸福であり得るだろうか、と疑問を起した。彼女自身の一生は幸福ではあり得ないのは勿論であるから論外であるとしても、女性が幸福であるためには先ず社会の機構そのものが変らねばな

らない。そして男性の性質も根本的に変化せねばならない。その後はじめて女性は平等の位置に立てるのである。しかし、それには女性自身も変らねばならない」(p. 188 抄訳)かくて、彼女は現状の世の中ではパールは生存すべきかどうか、と疑うのである。

さらに、「ヘスターは生れつきその精神は勇気があり、精神的であったし、また、社会から長い間孤立していたために、牧師にはもつことのできなかつた広い世界をもつにいたつた。彼女は道徳的原始林をさまよひ歩いた。知力と心とは原野を自由に探渉した。この七年間というものの既成の宗教、政治制度を客観的見地から批判し、教会にも政治にも少しも尊敬をもたなかつた」(p. 187 抄訳)と、作者は述べ、更に続けて、「彼女の苦い経験は彼女のよき教師であつて彼女を強くしたが、また、彼女に間違つた見解をも教えた」と批評している。この箇所では次に牧師の精神内容について作者の解説(前出)があるので、合せて読めば、両者の世界の対立と相違がよくうかがわれると同時に作者は客観的な態度をとつて、そのどちらにも味方することなく、双方に是と非とを認めていることが分る。

松山氏は彼女を異教徒とみているが、彼女の考え方は異教の徒のものとはまではないかと思ふ。彼女がパールに着用させた衣服、緋文字の飾りなどは確かに異教的ではあるが、ヘスターの思想は、少なくとも作者の述べる

かぎりでは、異教というよりはむしろリベラルな考え方である。異教とはキリスト教と同程度の信仰、情熱、神話を別の対象にたいしてもつことであつて、異つた宗教の形態であるから、ヘスターの場合はむしろ無宗教である、或は、ヒューマニズムの立場である。作者は、ヘスターが当時においてはより自由であつた英本国にその思想の故郷をもつ、と言う。

同時に、ヘスターは、作者がくり返しいうところによれば、生命力にあふれた女性である。「他人の危急のとき、彼女の温かい、ゆたかな本性が発揮された」(p. 183)。チリングワースもヘスターに言っている。「お前は立派なものをもっているのだ。私に会う前にもつとよい男性に会っていたら、こんなことは起らなかつたのだ。かわいそうに。お前の本性のもっている善き素質が無駄になつてゐる」(p. 197)。彼女のゆたかな生命力と抑えられた熱情は彼女と牧師のその後の交渉においても、また彼女のピューリタン社会との関係においてもみられるところである。

であるから、ここに二つの世界が対立したのである、牧師の十七世紀ニュー・イングランドの枠の中の精神と、彼女のほとんど現代的ともいえる精神と。ヘスターにあつては、秋山氏も指摘するように、真の罪悪感はなく、彼女の行為は penitence でなく penance であつた。彼女は自分の行為の結果を耐えしめただけにすぎない。彼女が最初の刑罰の後モブストンにとどまつたのは罪悪感からくる悔恨と償いのためで

はなく、牧師と運命的につながれた自分を感じたからである。北垣氏はこの箇所(彼女がピューリタン社会にとどまらうと決心したこと)を引用して、これは彼女に罪が意識されたからだとしてゐるが、この引用された箇所の意味は「本当の理由は彼女があつた世で結婚すべき(それが最後の審判の席上であつても)相手の牧師の住む土地であるからであつたが、彼女はその本当の理由を心中に感ずるのを恐れ、自分が他国へ行かないのは、ここにどまつてさんげの行いをしたいからだ、自分の心に言いよかせた」というのであるから、これはその証拠とはならない。

彼女に誤算があつたか。あれば、それは何か。それは牧師が自分と同じ世界に任んでゐるとの思い誤りであり、彼をつかんだと思つたことであつた。彼女は、如何に牧師が心の底までピューリタンの制約をもつた人間であるかを、知らなかつた。従つて、彼女は森の中で牧師に外国へ一緒に逃亡することをすすめた時、彼女の心ではそれが最上の解決であり、彼女にとつては心にひそめた夢の実現であつた。自由な外国で牧師を独占して生きる。これは彼女ひとりの計算であつた。であるから、最後の場面において、牧師がまだ告白をはじめていず、すでに行列の中で教会へむかつてゐるのを見ただけで、ある予感をいだいた。すなわち、彼女は牧師が自分の指の間から逃げて行くのを感じた(事實は、彼女は一度も牧師を本當につかんだのではなかつたが)。彼女は、彼が今は

自分以外の何らかの力の影響にささえられて歩いていていることを感じた。彼女は自分から逃げ出した彼に怒りさえ覚えた。彼女は森の中の会見を思つた。あのときは、お互の心の底まで分つていた。しかし、いま彼は長老にかこまれて昂然と歩いてゐる。彼のこの世の地位は彼女の手のとどかないところにある。さらに今みるように、全然共感のない考えの数々が彼の頭に立ち並んで、彼女との距離をつけてゐる。これまでのことはすべて幻影にすぎなかつた。牧師と彼女との間には本當のきずなは何もなかつたのだと思つたとき、彼女の心は沈んだ。——彼は二人共通の世界からしりぞいて彼の中に完全にこもってしまったのだ。そうして彼女ひとり暗黒の中に手をのぼして彼をつかもうとしても、彼は見出せないのだと思つた時、彼女は彼をほとんど許すことができなかつた」(p. 273 抄訳)。

彼女の夢みた理想の男女のあり方は、この物語の最後にべられてゐる。彼女は彼の死後ずつと歳月を経てから世の中の人々にこのような意味のことを語つてゐる。「遠い将来、世界がもっと完全になつた時、男性と女性の關係が共通の幸福という、もっと確固たる地盤にたつための新らしい真理が示されるであらう。ヘスターは若い時は自分がその真理を告げる予言者になれるかと思つたが、後に罪と苦しみとを背負つた自分はその役目の果せないことを悟つた」。彼女の夢みたのは、男女が共通の世界をもち、互に理解することであつ

たが、所詮これは夢であつた。こうして牧師よりも広く、ゆたかな人間性をもち、現代的な思想をもつた、行動的な彼女は、ひとりぼっちで牧師の死後長年をへてその後をおうた。そして、彼らは墓さえも別々に、離れ離れにほうむられる。「まるでこの二つの骨は一緒になる権利をもたないかのよう」に。彼女の方は、彼が宗教的勇氣でもつて達した天国を理解することはできなかつた。彼らは多分死後も別々の世界へ行つたであらう。

この二つの異つた世界は「森」において交錯する。森はそれぞれの世界において異つた意味をもつ。ちょうど一つのものを赤い色眼鏡と青い色眼鏡とで見たように、森は二つの意味の層をもつ。ヘスターの世界では、森は無害である。それは世間の迫害からの保護を与え、自由への門口になる。事実上においても、この森をつき抜ければインディアンの住む自由の原野があり、心理上においては、この森で自由のヨーロッパへ逃れる希望の熟していくところである。ゆえに、森は、彼女の見方からすれば、正しい健康な救いのシムボルである。牧師とそのピューリタン社会にとっては、森は異教ないしは悪のシムボルとして働く。森を悪魔の会合場と見なすヒンズにとつて勿論のこと、牧師にとつても森は悪の象徴となる。なぜならば、そこで得た解決策は彼の良心のうけ入れることのできないものである。彼が森から出てきた途端、急に冒瀆の言葉をはきたくなつたことは、彼にとつて森は魔の力をも

っていることを示す。このように一人の人にとっては良き業であるが、他のものにとっては死の魔業として働くというアイディアはホーソンの短篇「ラパチニの娘」のテーマにも使用されている。

現代では姦淫は法的制裁をうけない。しかしながら、罪の根本的な問題——人と神との問題——と、また人間対人間との問題、すなわち、愛の問題は永久に変わることのない問題であり、西洋では、表面的にはどうあろうとも、根本にキリスト教倫理が厳に存在するかぎり、人と神との問題は直接に人と人との問題につながるものである。ここにヘスター的態度とデイズデールの態度はいつ何時の世にも存在する、と言いつ得る。故に、『緋文字』はかびの生えた文学ではなく、永久の生命をもつ作品というべきである。

* * *

ヘスターと牧師と、どちらが作の主人公であるかの問題は答えに窮する。秋山氏などは牧師が主人公だというし、*American Literature and Christian Doctrine* (1958) の著者である批評家スチュアート (Randall Stewart) もまた同じ見解である。わたしは、むしろ二人とも主人公であると、言いたい。ただ作者の興味としては (作者ホーソンの他の作品から察すると) ヘスターをより健康で正常な人間であると認めつつ、十七世紀ピューリタニズムの魘魅魘魘の世界の中の必然的な構成員である牧師の心理の万華鏡を描き出すことの方に

より多くの魅力を感じたのではないかと考える。

秋山氏の論文は罪の問題に焦点をあわせてよくまとめられたものである。彼の見解は深く、かつ正しいと思う。Penance と Penitence の相違をしっかりと把握している。一つだけ申しておきたいのは、医師が牧師の胸を開いたとき、ここに緋文字を見たとき、同氏は象徴的な解釈を示しているが、この点は心せねばならないところである。原文では「医師は牧師の胸をひらいた。去っていく医師の顔は歓喜にみちていた」という意味になっていて、作者は決して「そこに緋文字があった」と作者の立場からは記述していない。最後の告白で牧師が胸を示したとき「それは啓示された。その啓示されたものを、ここに説明するのは場ちがいであろう。群衆はそのものすごい奇蹟にアツといった」と書かれていて、わざと直接にのべることをさけている。その後も、緋文字を見たという人々と見なかったという人々のそれぞれの意見をのべるだけで、作者自身の直接の目撃については記述していない。ホーソンは或る箇所では神のような立場で出来事の全貌を奥の奥まで直接に述べながら、超自然的要素に関してはあくまで明言を避ける慎重さをもっている。従って、われわれも引用文を出すときはそれだけ慎重でなければならぬ。つまり、ここのところは本当に胸に緋文字があったかどうかは判らないのである。ここにホーソンのロマンティズムがある。彼

は人間性と魂との問題においては冷酷なほど分析し、非樂觀的な結論を出している。この意味からして、彼は根底においてはリアリストである。しかし、現象面においては神秘と奇蹟とを現出させ、われわれを非現実の世界にさそう。われわれは作者の話術の魔力に引きずられて、たとえば、Aの字の現出でもそれを殆んど plausible としてうけ入れる心境になる。しかし一方、科学の洗礼をうけたわれわれの理性は「そんな筈はない」と叫ぶ。けれども彼はわれわれの科学的知識に挑戦はしない。彼は決して「Aの字が現われた」と明言しないで、われわれに判断をまかせるのである。

北垣氏が牧師はピューリタニズムの犠牲であって、彼は罪のゆるしを知らなかった。正しき神を知って、愛なる神を知らなかった、と論陣をはるあたり、非常によい着眼であると思ふ。

岩山氏のヘスター、チリングワース、パール、デイズブルの四人の探求は、その分析能力にすぐれていることは納得できるし、また彼の鏡の表象の研究は興味深いものがある。

松山氏の論文で一つ考えたいことがある。氏は『緋文字』について「本来、清教徒は head より heart を重んずるものであるが『緋文字』では逆に heart より head に傾いた清教徒のあやまちを描いている」という意味のことを述べ、また「ホーソンやメルヴィルが heart を重視したのは、より根本的にはアメリカのピューリタニズムの伝統に連っている

からである」と述べている点である。ホーソンやメルヴィルがピューリタニズムに連っていることを、わたしは否定するものではない。たしかに彼らは二人とも人生のあらゆることを第一に魂の問題とみなし、善と悪 (good and evil) というぬきざしならぬ二要素に分ける根本的態度を指すからであって、heart の重視のためであるとは思わない。第一、わたしはホーソンが heart を重視した作家だということを躊躇する。しかし、氏が heart と head とに分けた手法は極めて興味ふかく、多少の異論はあるか、ホーソン自身が二元的なものの考え方をする作家であったところからしても、ふさわしい分析法であると思ふ。特に、氏が「むすび」の最後に述べていることは真に正しいことである。

『緋文字』には実に多くの問題がある。この作中のアレゴリーとシムボリズムの問題、リアリズムとロマンティズムの問題、構成の問題などであるが、今回は中心テーマは何かという問題に集中した。